
IS < インフィニット・ストラトス> After sinking

杭打王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S > インフィニット・ストラトス > A f t e r s i n
k i n g

【Nコード】

N 9 8 7 0 X

【作者名】

杭打王子

【あらすじ】

ラインアーク防衛で水没してしまうリンクス四名は、約11メートルのネクストが2メートル以下のサイズになってI Sの世界に飛ばされてしまった。

彼らは見知らぬ世界でいったいどのような生活をすごすのでしょうか?!

プロローグ（前書き）

はじめまして、初投稿させていただきました。

この発想は某幻想入りのパクr・・・なのかな？

文がひどい有様だと思いますがどうぞよろしくおねがいします。

プロローグ

ラインアークは今最大の危機が迫っている。

「政治屋ども リベルタリア気取りも今日までだな、貴様らには水底が似合いだ。いけるな？フラジール」

カロードのランク1オッツダルヴァ

「はい。そのつもりです」

アスピナ所属のcube

企業連に雇われた彼らは俺を潰しに来た。そう、ホワイトグリントを・・・

潰されてしまえばラインアークは重要な戦力を失い、反クレイドル活動はおろか、フィオナやラインアークの住民を企業の攻撃から守ることすらできなくなるだろう。

この最高戦力同士の戦いは企業とラインアークの運命を左右することになるだろう。

上の連中はこの襲撃の前、リンクスの試験としてここを襲撃したりリンクス・・・ストレイドを俺の両機として雇ったそうだ。

「ホワイト・グリント オペレーター、フィオナ・イエルネフェルトです。ご協力に感謝します。共に幸運を」

彼女は喋れない俺に代わって通信を担当をしてくれる、前は喋れて

いたのだがリンクス戦争最後・・・プロトタイプネクスト・ARE
THAとの戦闘のさなかコックピットにコジマ粒子が混入、気管支
がただれて喋ることができなくなった。

「こちらストレイド・・・あんたの両機だ・・・邪魔はしないよう
にする」

両機が通信をおくってくる。彼のアセンブルはAALIAHをベ
ースに右手にはMOTORCORA、左手にはMONLIGH
T、背部兵装はTRESORが積んであり、ほとんどリンクス戦争
で潰された企業のパーツで組んであった。

戦闘が始まる・・・

相手のステイシスとフラジールはどちらも空中戦特化型の機体だ。
フラジールはマシンガンオンリーなので先に厄介なステイシスを先
に落とす。

ストレイドも同じ考えのようだ。フラジールを無視して二機で攻撃
を加える。

ステイシスはストレイドに向けて、弾丸と誘導弾でかく乱し回避先
にレーザーバズーカを浴びせかける。

「戦場に迷い込んだのか？素人が…話にもならんな」

「くっ！落ちろお！」

ストレイドは被弾しながらプラズマキャノンをぶっ放している。

俺はステイシスの後ろに回り分裂ミサイルとライフル弾の弾幕で攻撃
後ろからの攻撃を食らうとステイシスは180度反転するところら
に実弾とレーザーを放ってきた。

（ストレイドとも距離がある・・・ここは・・・）

多少の被弾を覚悟で急速接近し^{アサルトアーマー}AAを起動、ステイシスを緑色の光
で包み込む。

「クッ、メインブースタが完全に逝ってやがる。ダメだ、沈んでい
く… こんなものが私の最期か…」

悔しさと失望の声が聞こえる。さっきの攻撃でブースタを壊しかけ
AAで止めを刺してステイシスを撃破する。

しかし、

「逝ってしまいましたか・・・しかし彼はチャンスくれた。」

通信が入る、フラジールの四門チェインガンが二丁、こちらを向き、
火を噴く。

さっきのAAで^{ブライマルアーマー}PAは消えているホワイトグリントは弾丸の雨をも
ろにくらう。

「ホワイト・グリント、戦闘不能です。…彼はもう、あなたの助け
になれません。ごめんなさい」

ストレイドに送られた通信がこちらにも聞こえた。次の瞬間、海に着水・・・そのまま沈んでいく。

（結局、俺は誰も守れなかったのか・・・）

通信用キーボードに手を延ばし、

『すまない、フィオナ・・・』

という短い文を送信する。

そしてカメラは、二つの新たな波紋が海面にできているのを写す。それぞれの中心からネクストが沈んできた。

（相打ちか・・・この戦いの勝者は誰なのだろうか？）

そう思い、装甲が水圧でへこんでいくのを聞きながら目を閉じた。

そしてその数秒後声が聞こえた。

「その正体不明機！武器を捨て、手を上げなさい！」

女性の声だ・・・スピーカーからではなく、肉声だ。

そして“生身”で地面に立っている感覚がする。さっきまでネクス

トに乗っていて海に沈んでいたというのに・・・
目を開けるとパワードスーツを着た女性が数名、武器を構えて5メートルほど離れて囲んでいる。

「もう一度言う、武器を捨て、手を上げなさい！」

確かに何かを握っている感覚がある。確認すると051ANNRと
063ANNARが握られていたことに驚き、自分の腕を見て驚く・

自分の愛機ホワイトグリントの腕だったのだから・・・

プロローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

いやーまずい、フラジールを強くしすぎたかも・・・まああつちに
行ったらもちろん紙装甲にしますよ。

さて次回はグリントさんが質問をされまくります。

感想待ってます。

Examination (前書き)

というわけで2話目できました。

今回は少し長めです。

では、どうぞ！

Examination

自分に起こったことはあまりにも唐突過ぎた。

目を開けたら360度ホールドアップ状態で

海にいたと思えば陸に立っていて、

生身だと思ったら、2mサイズのネクストだったからだ。

頭の中が混乱している中、パワードスーツを装備した女性が銃を構えてさらに近づいて来た。

俺は反射的に銃口を上げた、
するとパワードスーツ部隊全員がトリガーに指を掛けた。

「変な気は起こさない方がいいわよ。おとなしく銃を渡して」

とリーダーらしきブラウンのショートヘアーの女性が俺に話しかける。

確かにP Aを展開しておらずA Aが放てない今、複数を相手にするのは馬鹿だ。

（拘束するなら今すぐ殺されることは無いな・・・ここは従った方がいいだろう・・・）

銃口を下げ、逆にストックを上げ、銃を取るように促す。

銃の近くにいた女性がそれぞれ受け取る。

「そのミサイルもね」

リーダーが肩を指差しながら言う。

（背部武器もちやんと付いていたのか。）

バチッ！バチッ！いきなりパージすると、

「「わっ！とっ」と」

さっき銃を受け取った女性が驚きながら、そしてハモリながらキャッチする。

「もう武器は無いわね？デイルン、ナタリー、後ろから付いてきて、武器は押収品倉庫に入れておいてね」

リーダーが指示をすると即座に二人が俺の後ろに回る。そして俺の装備は倉庫に持ってかれてしまった。

「じゃあ、付いてきて」

そういうと背を向けワードスーツが浮き、床がせり出している所へ向かって飛んでいく。

（！？ジェット噴射してないぞ。どうやって浮いてるんだ？）

「・・・・・・・・早く行け」

銃でつつかれた。こんな経験はレイブン、リンクスになってから初めてだ。

へマジかよ・・・ほんとにネクストになっちまったのか、俺は・・・

自分に何が起こっているかを考えながら連行されていた。今はエレベーターの中で、鏡に映った自分であろう物体を見ながら再確認する。もう一つ確認する点として、

ネクストの搭乗時に視界に映るAPの残量、ENゲージ、ECM濃度、リーダー、高度計が表示されている点があげられる。

武器情報、PAゲージ、ロックカーソルと狙撃点は武器を装備して
はなく、PAを展開していませんため表示されません。

だがAMS特有の精神障害がない、これはいったいどういうことなのか・・・

高度計がどんどん下がっていくのを伝えてくる・・・—10・・・—15・・・—20でとまる。

ドアが開くとリーダーが歩き出す、付いていくとなんとも重圧な扉の前にでる。

「さあ、中に入って、後で予想外事態対策官が来るから待ってて。」

中に入ると扉は閉まる。部屋には金属のテーブルと椅子が2脚が置いてある。イメージ的には映画ア○・ロボットの取調べ室だ。

（俺はサニータ的なポジションなのか、同じ白色だし・・・何とか対策官が来ると言っていたな・・・きつとスプーナー刑事だろう。まあ、とりあえず座るか）

背もたれが無い椅子に座る。もう一方の椅子には背もたれが付いていた。背中いろいろな付いているからの配慮だろうか？

（・・・てか、ここどこ？建物的ではなくて、緯度・経度的な意味で。）

さっきまでずっと自分がネクスト化したことを考えていたから場所などはあまり考えていなかった。

（ラインアークから陸地まで何キロだったっけ？3000キロはあるよなあ、それを目を瞑っていた数秒で移動すんのはむりだよな。常識的に考えて・・・）

V. O. B. 使ったって一時間以上かかるし、まず燃料がもたない。

（目をつむった時点で死んで天国にいったのか？いや、それは無いな。）

「目を開けたら、銃口が・・・！？」

なんていう天国は地獄だ。そして地獄はこんな近代的ではないはずだ。

いろいろなパターンを考えるとむしろ頭がぐちゃぐちゃになっていく・・・

ブシュウと自動ドアが開く・・・お？スプーナー刑事？ウィンクを見せてく・・・れ？

「貴様か、アリーナに突然出現した正体不明機とは・・・」

現れたのは黒のスーツを着る女性だった。雰囲気は霞スミカに似ている。彼女のつけていた小物はいつもピンクだったが目の前の女性はアクセサリー類をつけていない。

「ふむ・・・ISでは無いな、ならば無人機か・・・」

（ISって何だ？つかそれより！！）

「俺は人間だ！」

人間という存在を否定されたためそう言い返す。

（まあこのナリじゃ無理があるか・・・てか喋れたのか俺・・・確かネクストには拠点制圧のとき降伏させるために使うスピーカーが付いてたな。）

「どこにそんな四股の付け根が細い奴がいる？それとも脳みそが入っているのか？」

「肉体は無いが心はある」

胡散臭そうにこちらを見てくる。

「そうか・・・では名前と年齢、性別を聞こう」

「機体名ホワイトグリント、パイロット名unknown、〇〇〇〇
ピー〰️歳、男、だ」

「フッ・・・名前も正体不明か。まあいい、私は織斑千冬だ。機体名とはその体のことか？」

「ああそうだ。デザインはネクストのまんまだがサイズが六分の一になってる」

「ん？ネクストとはなんだ？新しい兵器か？」

「ええ！？アーマードコア・ネクストを知らないのか！？」

「アの字すら聞いたこと無いな。」

（地上に住んでいながらアーマードコアを知らないだと！？ドンだけ平和なんだ！でもライフルを持ったパワードスーツがいたよな・・・）

「・・・・・・・・・・」

「・・・その話は後にしよう。ホワイトグリント、お前の目的は何だ？そしてどうやってアリーナの中に入った？」

「目的なんてのは無い。戦闘中にやられ、海中で目をつむったら声が聞こえ、目を開けたらドーム場の建物の中に立ってたんだ」

「^{ドラッグ}薬物乱用は？」

「やってねーよ！鎮静剤は結構使うが・・・」

原因はもちろんAMS精神障害、アスピナが作ってるやつは良く効く

「そうか・・・ではどこから来たんだ？」

「自由海上都市ラインアークの近海だな」

聞いたことが無いなという顔をする。

「すまん、国名から頼む」

「国？そんなのは十数年前に解体されたはずだが」
「そう国家解体戦争・・・俺も死に掛けたからあまり思い出したくないな・・・」

「おまえは何を言っているんだ。国連加盟国は現在192カ国もあるぞ」

「エエエエエエエ！！！」

国が200個もあったときなんて50年ぐらい前だ。そりゃ驚くさ・
・

あちらはこっちの反応と質問の返し方にもしやと思ったのか

「まさかお前、別の世界から来たとか言うのか？」

「お、恐らく……」

この世界で聞くこと全てが自分の世界と違っているのだからそうなのだろう。

「ということは、ここがどこだか知らないのか？」

コクツコクツとうなずく

「ここはIS学園……」

と目の前の対策官、織斑千冬はこの世界のことを説明する。IS学園・IS・日本・世界情勢・アラスカ条約etc.……

（なるほどこの世界の最強の兵器はISでありそのための条約まであり、そしてここはIS関係のことを教え込むために作られた日本の施設で、織斑千冬はこの教職員だそうだ）

「さてと、現時点で話せることは全て話した。次はお前の番だ……」

「わかった……まずはACノーマルから……」

自分がいた世界のことを千冬と同じように説明する。ノーマル・ネクスト・リンクス・コジマ粒子・企業・国家解体戦争・リンクス戦争・経済戦争・クレイドル体制・コジマ汚染etc.……

「ふむ……つまりお前はそっちの世界の最強の兵器AC・ネクストに乗るリンクスで、撃破され水没したらその姿になってここに来たというわけだな？」

「ああ……」

（思い出したら心が折れそうだった・・・）

「まさかコジマ粒子がそんなに危険なものだったとはな・・・」

「ん？ここにもコジマ粒子があるのか？」

聞く限りでは問題になってなかったが聞かずにはいられなかった。

「ああ、あるぞ。そっちみたいに汚染を引き起こすわけじゃないが」

「それはコジマ粒子なのか？」

「話すより見せた方がいいな、待ってろ、今もって来る」

といい席を立つ

「え？あっ！ちょまつ！」

第一級の危険物を持ってくるといっているのだ。止めようとして当然。変態技術者どもなら止めることはしないだろう。

ブシューと自動ドアが開き千冬が部屋から出る。

（MA☆ZI☆KA☆YO☆！もってこれんのお！？百聞は一見にしかずっていうけども！それより侵入者から目を離してもいいのかよ・・・逃げる気は無いけど）

十数分後、千冬が戻ってきた。右手に禍々しい光を放つ粒子入りのコルク栓の子瓶をもちながら・・・

「び、びび、瓶詰めって・・・」

こっちじゃそんなことすればコジマが漏れて皮膚が焼け爛れだしますよ。

「そんなにビクビクするな・・・どうだ、そっちのやつと同じものか？」

（見た目は同じだな・・・P A整波装置を使えば分かるか？）

そう考え腕部のそれを迫り出し、瓶に近づける。

「さっき言っていたP A整波装置か、なるほど」

作動させるとコフオオオオという音とともに瓶の中の粒子が舞い始める。

「どうだ・・・？」

「本物です・・・」

整波装置をしまうと何故か安心した気持ちになった。自分がこの世界で生活しても大丈夫ということが分かったからかもしれない。

「・・・この世界でコジマ粒子はどんな扱いなんだ？」

先ほどは聞けなかったがこの安心感のおかげで聞けた。

「緑色に光るキレイなただの砂として知られている。人体には無害、そのためこのように瓶詰めすればキーホルダーになる。ただ摂取しても大丈夫だがかなりマズイらしい」

瓶を振りながらそういう。

（キーホルダーだと？あ、ありえねえトーラスでもそんなことしねーぞ。しかも摂取って・・・誰か食べたのかよ・・・）

「それ・・・誰が持っていたんだ？」

「ここの教員の山田真耶先生が持っていて、前に500円で買ったそうだ」

すげーなあ・・・そいつ・・・

「こんなところか。これで取調べが終わる。・・・それと最後に聞くがここで働く気はないか？」

「へ？」

「つまり雇いたいと言っている。お前がこのまま外に出れば、騒ぎになり、捕獲され、ねじの一本まで分解されるぞ」

ゾツとする。そういうのはAMS接続プラグ手術で十分堪能した。

「お願いします」

「分かった。私はこれからお前のことを会議に掛けてどうするかを決める。最終決定は上だが、期待していてくれ」

そう言うのと千冬は席を立つと自動ドアが開き、外に出る。
数秒後またドアが開いた、

「暇なのだろう？ならこれを読むといい」

渡されたのはなんとも分厚い本だ。表紙には・・・

「IS学園へ、ようこそ！」

Examination (後書き)

歓迎しよう、盛大になー!!

今回も最後まで見ていただきありがとうございます。

コジマ粒子は無毒にしておかないといけません。有毒↓PA張れない↓ISに勝ち目なし↓マッハで蜂の巣↓ジェネレーターがイカレただと? ↓コジマ汚染でさあ大変! になるからです。

少し長すぎましたかね? ご指摘願います。

それとできれば感想もお願いします。

次回は、リンクス? 試験です。

B a t t l e e x a m i n a t i o n (前書き)

遅れましたが第3話です。

今回は長い・・・かな？それに比例して文法が・・・

ちなみに原作の時間軸は5月です。

では、どうぞ！

Battle examination

「おめでとう、今日から君はレイヴンだ」

懐かしい・・・かなり前のことだ。

「あなたにアナトリアの傭兵として戦ってもらいたい」

これは国家解体戦争の後、コロニー・アナトリアの中だ。

「ホワイトグリント、戦闘不能です。・・・」

これは・・・

「おい、起きろ！ホワイトグリント！」

ゴン！ゴン！とコアを叩かれる。脳みそに来る響きだ。無いけどな・

「ん？」

どうやらあの分厚い本を読んでいるうちに寝てしまったようだ。

この体は眠ると頭がコアに埋まっている状態（OPのアレ）になるらしい。

そして頭を外に出すと

「起きたか、さっきの格好はずいぶんと眠りやすそうだったな」

目の前には織斑千冬がいた。

「おゝ、千冬さん。会議はどうだった？」

寝起きでそう聞く。

「別にかまわないそうだ。というわけで学園警備員として雇う。」

（警備員ねえ・・・ネクストは防衛にむかないけど、まあいいか。
今までラインアークを守ってこれたし）

企業連は度々ラインアークにいやがらせ・・・もとい襲撃行ってくるのでそれから守るためにホワイトグリントで防衛していた。

「・・・あとISとの戦闘試験を受けさせるらしい。」

「ISと戦うのか？チュートリアルで？」

（訓練機体でネクスト戦のようなもんだよな・・・）

「上の連中はお前を高く評価しているんじゃないか？戦闘経験はお前の方が多い。まあ最強対最強が見たいだけかもしれないが・・・」

不敵な笑みを見せる・・・まさか千冬が受けさせようとしたのか？

まあ、ISとネクストは場所が違えど、どちらも通常兵器じゃ太刀打ちできないほどの火力と防御力を持っている。

じゃあそれらをぶつけ合ったらどうなるんだ？とか思いついたんだろう。つまり某番組^{ほんたて}だ。

「俺の装備は？」

「第0アリーナに運んでおいた。そこで試験を受けてもらう。あと、お前と戦うISは“ラファール・リヴァイブ”だ。」

どうやら第二世代型のISと戦うようだ。その機体は機動力優先型で癖が無く操作しやすいのと、対応している装備が豊富なマルチロール機だ。それなのにパイルバンカーが標準装備という玄人仕様でもある。

「わかった。試験はいつからだ？」

「一時間後だ。試験前に体を動かしたいか？」

「ああ、FCS、出力関係がどうなっているか調べたい」

機体のブースター出力知らなくてQB吹いたら壁にズドン！とかみっともなさ過ぎる。

「ならば、行こうか」

少し移動してピットに入る

「さて・・・俺の装備はこれだな・・・」

ライフル2丁は握れるがミサイルが付けられない・・・

（背中幅が大きすぎる・・・修正はいらないが）

「スマンがミサイルつけてもらえないか？手が届かない」

「ん、わかった。ここのジョイントだな？」

「ああ、差し込んでくれればロックできる」

千冬は軽々とそれを持ち上げ、一つずつ付けた。女性一人で持てる重さじゃないとおもうが・・・

「準備運動は、30分間やっていいぞ。私は管制室にいる」

「了解」

千冬がピットを出たのを確認し、

『システム、戦闘モード、起動します。』

OSの音声を聞き、ピットからアリーナに出た。

「そろそろ時間だ。ピットにもどれ」

アリーナに付けられたスピーカーから声がする。

俺は30分間みっちりと六分の一サイズの機体を動かした。AMS
障害が無く、不快感もないみたいだ。

この世界では、ブースタの水平推力、垂直推力とクイック推力が前
の世界に比べて出力が上がっており、消費が少なくなっている（飛
び続けるのは無理）

PA整波装置は問題なく動作しPAがキチンと整波され、FCSも
異状が無いことが分かっている。

APの値は6分の一では無く、前の世界と同じだ。

分からないのは自分の装甲のレベルと、PAの厚さ、武器の威力、
AAの威力ぐらいだ。

『システム、通常モードに移行します。』

PAを解除した後、ピットに入り、置いてある長いすに腰掛ける。
数十秒後、千冬が来た。

「なかなかの瞬発力じゃないか。そしてさっきの緑色の膜がコジマ
粒子を使ったPAか？」

千冬表情はコジマに興味がわいてきた。という感じだ。

この世界のコジマ粒子は生物に対する有害性がまったく無い。その
ためPAやAAを使用しても大丈夫だそうだ。

「ああそうだ。実弾がそれに当たると、速度が落ち、さらに分子が
分解され、威力が落ちる。レーザーの場合はコジマに当たって威力

が減衰する。」

「万能だな」

「しかし、攻撃を受けると安定還流が乱れてしまい、防御効果が低下する。」

「攻撃を受け続けたらどうなる？」

「最悪PAが無くなり、素っ裸になる。時間がたてば回復するぞ」

ほおと言う千冬・・・コジマには人を引き付ける何かがあるのか？
トラスしかり、アクアビットしかり・・・

「それはそうとあと何分で試験開始だ？」

「5分だ。私は試験準備をしておく」

機械だから肉体的な疲労は無いだろう？といいピットをでた。いや
みを言いやがったぞ。

「はぁ・・・コジマが無害・・・か」

もしそうだったら前の世界はどうなっていたのだろうか・・・ふと
考えていると水の球体が目の前を通過する。

「うおっ！？何だこれ?!」

無重力以外じゃできない現象に驚く、するとその球体がヘッドパー
ツに突っ込んでくる。

「おおおおお!!???」

だが頭部スタビライザーに突き刺さって止まった。

「驚いた？」

いたずらが成功して喜んでいるような声が聞こえる。球体を付けたままカメラをそちらに向けると蒼髪の少女が扇子を持ちながら立っていた。

「……君はこの生徒か？授業中じゃないのか？」

つか立ち入り禁止じゃねえの？

「さっき終わったの、それよりあなたが朝っぱらからきた侵入者？」

と蒼髪の少女が質問してくる。別に答えてもいいかと思ひ

「そうみたいだな……」

と答える。

「ふくん……ていうかあなた人？」

またそれか……勘弁してくれ。

「肉体は無いが心はある。名前もある、ホワイトグリントだ」

「あら、ごめんなさい。私は更識楯無、IS学園の生徒会会長よ」

目の前の少女・・・楯無は誇らしげに言う。そんなにすごいのか會長で

「この学園じゃ最強って意味なのよ？」

うお、なんか読まれた・・・

「そうなのか・・・それよりこの水球は何なんだ？」

「ふふっ、秘密♪ それじゃあね、白き閃光さん」

ダッシュでピットから出る楯無

「え!?! ちょ、ま!?!・・・・はあ・・・・」

なんなんだあの子・・・

するとドアから開いた扇子を持った腕が出てくる。扇子には激流と書いてある。

はて、何のことやら・・・

扇子がパチンと閉じられた瞬間、水球の形が崩れる。

「うおおお?! なんじゃこりゃー!」

胸部装甲に水がかかり、ピットの中で騒ぐ、もう一度ドアを見ても腕は引っ込んでいる。

「試験開始時間だ。アリーナに出ろ」

千冬の声がスピーカーから聞こえる。

「ぬおお、ちくしょうこのまま行くしかねえじゃねえか」

『システム、戦闘モード、起動します。』

再びOS音声を聞き、PAを張りながらブースターを吹かしアリーナに出る。

アリーナの中央には、千冬の言った通り、リヴァイブが浮かんでいた。

自分もアリーナの中央に浮かぶと相手の顔が見えた。緑髪・碧眼で眼鏡を掛けている。俺をみるとこの姿に少し戸惑っているようだ。

「これより対IS戦闘試験を開始する。試験官は山田真耶先生だ」

（この人がコジマ瓶を持っていた人か・・・機体も緑色だし、緑色が好きなのかな？）

「さて、この試験は、山田先生のシールドエネルギーを削りきるか。ホワイトグリン트가圧倒的に不利になるまで行う」

つまりこの試験に二度目はないが、生かせてもらえる。ということだ。

「よ、よろしくお願いします。」

「こちらこそよろしく・・・」

相手が挨拶をしてきたのでこちらも返す。

「あの、何で濡れてるんですか？」

「生徒のイタズラに会いました」

ああ、あの子ですね。と答える山田先生、会長のイタズラ好きは有名ならしい

「では、ブザーが鳴ったら戦闘開始だ」

さっきまで喋っていたがその声が聞こえると両者臨戦態勢を整えた。緊迫する瞬間だ。アリーナ、オーダーマッチでも体感している。

そしてブザーがなる。

それと同時に後退し、FCSがロックしたところめがけて2丁のライフルを連射する。今のところ腕の運動性能を超える速さで動いていないので弾丸はよく当たる。青いハニカムに弾かれているがそれでダメージは与えられているらしい。

相手もライフルを撃ってきた。弾速もなかなか、がPAに威力を持つていかれ、俺に当たるころには、装甲をへこませることすらできなくなっていた。対PA用の弾を使わないと、大体こんな感じになる

「あわわ、まったく効いてない・・・」

焦りの声を上げる。その間にも俺はスライド移動しながらライフルを撃ち続けシールドを削っていく。

すると山田先生は武器をマシンガン2丁に持ち替え、接近し雨を降らせてくる。

そんなの喰らったらPAが持たないので、距離をとりつつ右へ左へとQBを吹かしまくった。
ドビャア！ドビャア！

十数発命中したが、臆することなくライフルを連射する。

「通常弾がだめなら榴弾で・・・！」

こんどはグレネードランチャーが出てきた。日本のグレネードは・・・マズイ・・・

ボン！ボン！ボン！と三連射。む、無理だ、避けられねえ

ドガアアアン！！

「やったか？！」

もくもくと煙が上がる。だがフラグ

「まだまだあいけるぜえ！」

と言い分裂ミサイル発射する。グレネードによる機体の損害はあまりなかった。どうやら防御力は前の世界と同じのようだ。

「ミサイルなら打ち落とす！！！」

グレランをライフルに持ち替え引き金を絞ったがミサイルは弾を避けるように分裂した。

「えええええ？！？！そんなの聞いてな・・・」

ボボボボーン！！

煙が空中でもくもくとたっていた。するとその中からリヴァイブがパイルバンカーを装備して急接近して来る。

「どおりやああああ!!」

遠距離戦じゃ勝ち目が無いと思って、近距離戦を仕掛けて来たみたいだ。だがそれはあまい、近距離武器が無いと思ったら大間違い。PA整波装置を隆起させカメラを閉じる。レーダーでISが射程に入るのが分かる。

コジマ粒子を圧縮し、AAを起動する。

「単純馬鹿が……」

「え？」

ズドガアアアアアン!!!!!!

ちょっと前の地上

一夏主観

今は放課後のIS特訓のため第三アリーナに向かう途中。

メンツはいつもの3人組だ。

「ふいゝ今日は大変そうだなゝ」

「何がだ？」

「先生達、ほら朝のアレだ。侵入者がなんたらって、あっただろ？」

今日は朝っぱらから大騒ぎだった。鳴り響く緊急放送で騒ぐ生徒達。まあ、うちのクラスには千冬姉がいたからすぐ収まった。それでも騒ぐ連中は伝家の宝刀、出席簿で机に沈む。

その後、千冬姉は放送で職員室に呼ばれていったので今日の授業は山田先生オンリーだった。

そして山田先生の放課後の補修を受けようとしたら

「ごめんなさい、織斑君、今日は侵入者の件があるので無理です」と言っ、どツかに走って行ってしまった。

「ええ、なんだったんでしょね。ただの人間ならあそこまでする必要は無いですわよね」

口を開いたのはセシリアだった。ただの人間ならと言ったのは、普通の高校では普通に脅威だがIS学園では人間はおろか戦車で来ても脅威にならない、持って5秒、最速1秒の世界だと思う

「もしかして宇宙人とか？」

「まさか・・・それより一夏、来週からクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナの試合用調整があるから、特訓は今日までだな」

話題を変える筈、あと5分はあの話でいけるのにな・・・

「そういえばそうだったな」

「IS操縦もようやく様になってきたな。今度こそ・・・」

「まあ、私が教えてあげているんですもの。できて当然ですわ」

「ふん。中距離射撃型の戦闘法など役に立たない」

「それだったら篠ノ之さんのISを使用しない訓練なんて無意味ですわ」

「もう始まったよ。言い争い、日英同盟が懐かしまれる。しらんけどそしてアリーナに付いた俺らは、ピットに入る。」

「おそかったじゃない、一夏！」

ピットにいたのは鈴だった。一瞬片腕が無いように見えたがちゃんと付いていた。

「何だよ、鈴」

話がしたいからここにきたのだろう。ならば聞くしかない。

「早速で悪いけど謝りなさい！」

「はあ？何で謝んなきゃいけないんだ」

「乙女の約束を踏みにじったからよ」

「約束は覚えてただろうが!!」

「意味が違うのよ、意味が!はあ、あったまきた。どうあっても謝らないっていう訳ね!?!」

「説明してくれりゃ謝るっての!」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしようが!」

何が言いたいか分からない。今の鈴は人の言葉も解さんだろう。

「じゃあこうしましょう!来週のクラス対抗戦で勝った方が負けた方に一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね?」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな!」

「アンタもあたしに謝る練習しておきなさいよ!」

「何でだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは!この朴念仁!鎧土竜!粗製!アホ!馬鹿はアンタよ!」

鎧土竜ってGじゃねえか。それは俺でもムカつく

「うるさい、貧乳」

あ、やべえ、危な――

ズドガアアアアアン!!!!!!

「な、なんだ!？」

よろめくほどの爆発がした。鈴を見ると動揺しているようだが腕がIS化していた。そしてそれを振り上げたままもてあましている。

「鈴・・・今のお前か？」

「違うわよ!それよりアンタ、言っではならないことを、言ったわね!」

これは、マズイ、マジギレだ。

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』!?!今の『も』よ!いつだってー」

《異常な爆発を検知しました。生徒は職員の誘導に従って避難してください》

放送が入り鈴の言葉が遮られた。

「皆さん、大丈夫?こっちよ」

先生がピット入ってきて避難をうながす。

「チッ・・・」

舌打ちをする鈴、そして強く俺を睨んだ。
俺らは、避難中、一回も喋らなかった。

（鈴の一番気にしてることを言うなんて・・・謝らないといけ
ない・・・）

地下20メートル

W・G・主観

「・・・で、弁解はそれだけか？」

「本当にすみません・・・」

俺は今絶賛説教中（される側）、山田先生には勝ったんだが。

「ああ・・・こんなにしやがって・・・」

アリーナの方を見て頭を抑えながら千冬が言う、
これはかなり・・・いや、すごくひどい。

特殊合金の床にはクレーターができ、その周りの床はめくれ上がり、
照明器具は全破壊と言うありさま。

原因はもちろんトールラス提供のアサルトアーマー

「はぁ・・・山田先生が死ななくてよかった・・・」

申し訳なさマックスのため息をつく

AAをもらに食らった山田先生はマッハで保健室行き

ついでに言っとくとリヴァイブは大破、ダメージランクはDを超えてこっちもマッハで整備室行き

「まあ、これで上の連中もお前の強さがわかっただろう。試験は合格、てところか」

「ありがとうございます」

「明日はいろいろと準備してもらおう。警備は明後日からだ」

こうしてホワイトグリントの学園生活（警備員）が始まったのだ。

B a t t l e e x a m i n a t i o n (後書き)

最後まで見ていただきありがとうございます。

ああ、うまく起承転結にまとめられてない気がする。

異様に長くなりましたが意見、感想お願いします。

次回はザ・警備員です。

追記..修正しました。盾無↓楯無

『AC、○○モード、起動します』↓『システム、○○モード、起動します』

R e c o n s t r u c t i o n (前書き)

ハッハー！一ヶ月近くかかったが、まだまだいけるぜメルツエエエ
ル！！

というわけで4話です。遅れてすいませんでした。
オリジナル設定大噴出でお送りします。

Reconstruction

AAでアリーナもろとも山田先生を吹き飛ばした日の翌日。

その後、俺はアリーナの修理に動員されほぼ徹夜で作業していた。用務員の轡木十蔵さんは最初こそビビッてはいたものの話しているうちにフレンドリーになった。

歳は70近いってのに徹夜できる体力。凄まじいな……作業内容はめくれ上がった装甲板の切断。特殊合金ってこともあって切断は至難の技。

レーザーブレードを積んどけば良かった。

そして作業中、千冬が登場、付いて来いといわれ地下整備室へGOしたところだ。

地下20メートル 地下整備室

W・G・主観

「で、何なんです？」

「お前は機械だ。メンテナンス係りを付けた方がいいだろ？」

「え？ ああ、俺は今ネクストになってたな……」

何故か知らんが俺は今、完全無欠の自律ロボットになっているのだ

「よし、じゃあ入ってきてくれ」

自動ドアが開きそこからブラウンヘアの女性が入ってきた。

「また会ったわね」

入ってきたのは昨日、俺を連行した隊長。ISでは無くいまはVネックカットソーにスラックスという服装だ

「彼女がお前のメンテ係りだ」

「よろしく、ローズ・クラークよ」

「ホワイトグリントだ。よろしくローズさん」

手を差し伸べてきたので手を取り握手する。指も細くスタイルもいい、なかなかの美人だ。

「ローズ先生はIS学園の教員で、整備課で彼女に任せたISは稼動効率が三割ましになる。所謂システムエンジニアだ」

三割り増しってドンだけだよ。FRSメモリでフルチューンしたってそこまで行かないぞ。

「戦闘も強いぞ。ISではあらゆる武器を使って効率的に敵を撃破するし、生身での格闘戦では四股が？げるぐらいのラリアットをかましてくる。付いたあだ名は『最強のエンジニア』だ」

じよ、冗談じゃ・・・

「最強は褒めすぎよね？織斑先生・・・それで、彼にPICとかステルス迷彩をつければいいのね？」

は？PICとかを俺に付ける？聞いてないぞ

「ああ、このままだと不便だからな」

ローズ先生に答える千冬。

あれ？話がどんどん進んでいる。付けられる側の俺は何のことかわからねえのに

「ストップ！話についていけない」

俺の言葉に千冬はそういえばという顔をする

「話してなかったな。IS学園の警備をするにあたってお前の移動手段が問題になった」

「い、移動手段？」

問題ない気がするんだが・・・肩幅は別として

「まず、歩行は揺れがひどくて生徒が勉強に集中できない。ブースターは排気熱と音が問題だ。窓から

ムわつとした空気が入ってくるのは不快だろ？」

たしかに勉強中、そんなことがあったら全力で抗議するな。

「そこでPICだ。音も無いし排気も出ない、おまけに小エネだ」

俺に付けられるであろうPICというものは、ISの基本システムで、これでISは浮遊・加減速などを行うことができる代物だそう
だ。

「なるほど。じゃあステルスをつける理由は？」

「・・・お前が市民の目に留まると厄介なんだ」

厄介をフォルテシモで言われた。まあ、仕方が無いのだが

「わかった。その改造、受けよう」

「あら、すんなり了承したわね。改造に抵抗がありそうだと織斑先生が言っていたのに」

「どうせお尋ね者なんだ。抵抗しても仕方が無い」

別に悪い話じゃないしな・・・IS学園とのつながりを深くする好機ですってか。

「交渉成立だな。私は教務にもどる」

お疲れ様とローズがいい千冬は出て行く

「さて、早速つけましようか。そこに座って・・・ええと・・・これね」

俺は指差された台に座ると彼女はオプションパーツみたいな物があった金属のトレーをもってくる

「それをつけるのか？それぐらいならここに入りそうだ。固定は武器用のレールを使えばいいな」

といいコアの格納庫をひろげる。彼女がトレーを置き、そこをのぞくと

「取り付けにぴったりね」

といい顔を上げる。髪の毛を耳に掛ける動作は、いい・・・ものだな・・・。

わかるだろう？わからねえか？わかってるんだろう？

「取り付け場所はOKと・・・。エネルギーENはどこから取る？」

「あ？ああ、格納庫の開閉用につながっているやつを使うといいな、一番が装甲が薄いのは付け根だ」

「ここね」

指で内側を触られる。感触はないが変な気持ちだ。

「EN供給をきった方がいいか？」

「そうね。感電が怖いし」

そう聞くと俺は格納庫の隔壁閉鎖をする。この機能は破損した部分からの漏電を防ぐのに使われるもので、本来はオペレーターが操作するものだがパイロットでも操作できる。

「EN供給をカットした」

「ありがと。でもこれって血液を止めてるのと同じね」

う・・・そんなことしてるのか俺は・・・まあ生身だったら腐りだすけど・・・

「・・・それじゃいくわよ」

バイザーが漢字の「非」に似ている溶接マスクをつけ、メス型プラズマカッターを俺の体にあてた

激しく火花を散らしながら、内側の装甲を切り取る。

「はい、取れた。この奥に見えるのがエネルギーパイプね。これは円形に・・・」

くると円を描くとピンセットを取り出しカットされたパイプを引き抜く

「ふう・・・ENを流してくれない？電圧とか調べたいから」
「分かった」

言われたとおりにENを流す。すると彼女はテスターを取り出すとENパイプに押し付けた。

「電圧、電流も許容範囲内ね。これでENはOKと・・・操作はどうする？千冬先生の話聞いてるとIRSとかFRSとかにつないでしまうのがいいと思うけど」

（千冬の話・・・ということは昨日の取調べで得たことをすでに伝達しているのか。）

彼女が言ったIRSと言うのはAMSから送られてくる動きのイメージを解釈し命令を伝達するシステムだ。この役割は人間で言う小脳や脳幹とほぼ同じで、これが壊れるとネクストは動かなくなってしまう。

それが理由なのか脆いで有名なアスピナのSOBREROも頭部だけにはかろうじて防御性能を上げていたみたいだ。

あと、FRSと言うのは各パーツに流された命令を受け取り実行するシステムだ。人間で言うならば運動神経に当たる部分だ。これも吹き飛ぶと動かなくなる。

「伝達系につながるのか・・・」

「ええ、ISが操作するときも脳内のイメージを読み取って最適化された命令で動作しているから、操作しやすいと思うわ」

「システム干渉しないのか？」

警戒して当然。システム障害が発生し、イメージが逆流して脳を焼き切られる事故もあったからだ。

「そこなのよね……。あ、そうだ。立体でイメージすれば干渉しないんじゃないかしら」

「立体か……。確かにそれを使う命令はないな。でも、使うことが無いということはそのイメージが解釈されないことなんだが……」

「そんなことできるの？」

「ああ、前の前に住んだところがIRS／FRSの研究所アナトリアだったからな。メインシステムに干渉しない独立したものを追加するぐらいならできる」

まあ、暇そうだったフィオナの話を聞いていたらいじれるようになってたんだけど。

「よかった。はい、使う立体をコードにしといたから、これを使って」

携帯用ディスプレイを渡され、受け取った。この短時間でどうやって準備したんだ？

「ありがとう。さて、少し頭の中をいじるか」

「じゃあ、私はその間に伝達系につなぐ穴をあけてPICとステルスの中に付けてるわ」

「伝達系の場所は左右の格納庫を隔てている壁の中だ」

神経が通っている部分を教える。変なところを切られては困る。

「了解」

といい彼女はプラズマカッターを握り直し格納庫に手を入れる。

こちらにも始めるか

『システム、調整モードに移行します。』

このモードはFRSメモリなどを設定するためのものだ。

戦場ではまったく聞くことが無いOSの音声を聞くと、ウィンドウが眼前に広がった。元の世界では、コクピットのディスプレイにウィンドウが出るのだが、肉体がネクストだとなるらしい。視線を動かすとカーソルも動く、それを動かしIRS設定のウィンドウを探す

(と、何だこれ？記憶データ？前は無かったよな・・・)

興味本位で開いてみると膨大な数のサムネイルが現れた。端にはキーワード検索、日付検索などの検索ツールがある。

(これ全部、俺の記憶か？じゃあ試しに・・・)

『ソルディオス』と脳内で入力してみる。するとサムネイルに渦々しい球体が映った。

(うわあ、記憶だコレ。・・・てことはエロイものを一回見れば反芻できるのか！？しかもデータのコピー転送が可能・・・ぬっふっふ)

検索にカーソルを合わせ入力する。が、『フィオナ おxt』と入力した所で声がかかる。

「どう？設定できそう？」

「え！？ああ、そうだな・・・」

「それはよかった」

もしコレが普通のパソコンだったら、恥ずかしくて死んでいるだろう。

・・・オカンにエロファイル見られた学生みたいだな、俺。

俺は記憶データファイルを閉じ、IRS設定のウィンドウを開くと、そこから追加設定を開き、渡されたコードを入力しはじめた。

「ちょっと聞きたいことがあるんだが・・・」

コード入力も大体終了したところ唐突にきいた。

「ん、何？」

PICを固定し終わり、ステルスを固定するナットを閉めながら聞き返してくる

「俺の弾薬とかどうなってるんだ？」

この世界じゃB・F・Fなんていう企業はおそらく無いだろう。MSACインターナショナルもないから実弾のみの俺は弾薬の供給が無いことは死活問題である。
つくづくEN武器を装備していなかったことが悔やまれる。

「ああ、それね・・・ライフル弾は別に問題なく頼めるんだけど。ミサイルがね・・・同じものを注文となるとむりね」

「まあ2・8メートルのものを縮小したものだから技術的にも無理があるのか？」

「もともと分裂ミサイルと言うカテゴリがないのよ。企業に発射機ごと提供してみれば換わりになるものを作ってくれるかもしれないわね」

「じゃあ早速P I Cで動いてみましょう。円錐のイメージを頭上に作って・・・」

お、スルーしやがったな。

まあいい・・・イメージを浮かべるか

P I Cを起動し言われたとおりにイメージする。

「お、お、お？浮いてるのか？」

イメージしたら高度計がじんわりとあがっている。なんていうか今まで感じたことの無い感覚だ

「ええ、浮いているわよ。そこから前に円錐をイメージして・・・」
またイメージすると前に進んだ。

「次は右、左、後ろと水平移動してみて・・・」
言われたとおりの動きをする。

「O K。次は球体を回すようなイメージ・・・」
すると自分は右に旋回した。

「逆回りでイメージ・・・」
こんどは左に旋回している。

「よし。問題なしね。下に降りてきて」
P I Cを切り地面にズンと降りた。

「あ、ステルスはどうする？ソースコードに入れなかったけど・・・」
「

「ステルスは大丈夫だ。もともとイメージできるようになっていたからな」

といいステルスを起動してみせる。

「おお、まったく見えない。これなら上に出てもいいわね」

「上？と言うことは地上に出るのか？」

「ええ、警備員として働くんでしょう？ここを案内するわ。付いてきて」

整備室から出たあと、俺がこの地下に入ってきたエレベーターで地上にでた。

そして俺はステルスとP I Cを起動しローズの真上を飛んでいる。

I S 学園はいま一時間目の休み時間らしい。教室にも廊下にも女の子があふれていた。

地上1階・通常学習クラス

W・G・主観

《ここが生徒が授業を受ける教室よ。30人1クラスで4クラスが三学年あるわ》

ローズが無線で説明してくる。この無線は人の思考を読み取って発するものだそうだ。口を開かずに他人と意思疎通ができる代物。こちららも声を発さず無線を返す。・・・機械だからできたみたいだ。

《すごい数の女の子だ。しかも全員かわいいな。だが避けるのが大変。よっと》

感想を一つ言い。つま先が生徒の頭をえぐるところをぎりぎり避

ける。

《うちの生徒に手を出さないでね。っていつでもその体じゃ無理よね》

うわ、ひでえ。人前に出れない体のこと言いやがった。

《窃視なら・・・》

《犯罪よ》

《やらないぞ。俺にはフィオナがいる》

《え？まさかその人のことを・・・》

《そういう意味じゃねえ！命の恩人で恋人だ！さっきの映像はたまたまで・・・》

《ふーん？ま、教室はこんなところね。次は医療棟よ》

適当にあしらわれた俺は引き続き彼女の上を付いていく
医療棟とは、この学園では旧軍隊なら一機で一個大隊を相手にできるISを扱っているので事故が起こったとき怪我が重症化しやすい。そのため迅速な対応ができる大学病院並みの設備を備えた医療機関らしい。

《医療棟？保健室もそこか？》

《ええ、山田先生がいるわね。謝っておきたいの？》

《ああ・・・》

自分の運命を懸けた試験だと言っても極至近距離でアサルトアーマーを叩き込んでしまったのだ。
謝罪ぐらいしないといけないとは思う。

《じゃ行きましょうか》

少し移動して医療棟

《ここが保健室よ》

保健室と書かれた板が扉の上に付いてる

《さ、入りましょう》

手を扉にかけようとしたとき勝手に扉が開いた。

「お、織斑先生・・・！」

目の前に立っていたのは一年一組の面々だった。そういえば山田先生は1年1組の副担任だったな。

「ローズ先生。アレはどうしました？」

「え？ ああ、真上にいますよ」

あれというのは俺のことだろう。

そしてローズの言葉を聞いた千冬は視線を上げ、目を合わせた・・・気がする。俺、見えてないよな？

「織斑先生、通れませんよ。あ、ローズ先生もお見舞いですか？」

「え、ええ、ちよっとね・・・」

なぜ焦ったような声で・・・犯人がいるからか？真上に。

「私たちは授業を始めるのでこれで・・・」

ローズが道を明けると千冬を先頭にぞろぞろと出てくる。その中に一人だけ男がいた。

《彼が織斑一夏か。なるほど千冬さんの弟だ》

《そうよ。この学園であなたは三人目ね》

《女の園の男同士、ぜひ仲良くしたいものだな》

《寮で待ってれば？》

《何その襲う的な感じ、てか女子が同室って聞いたぞ。大丈夫なのか？》

《幼馴染らしいわよ》

《よけい大丈夫か？》

会話が終了すると全員出た。そのタイミングでこちらも入る。中には緑髪碧眼の山田先生がいた。

「山田先生。お見舞いに来ましたよ」

「あ、ローズ先生。ありがとうございます」

「原因は何て生徒に言ったんですか？」

「IS操作中の爆発事故と言っておきました。ロボットにやられたと言っても誰も信用しませんし」

「あく確かに。あと体の調子はどうですか？」

「肋骨が何本か逝ってますけど、明日からがんばりますよ！」

と意気込む山田先生。うう、心が痛い・・・

「あまり無理しないでくださいね。後、彼が謝罪したいそうです」
「彼？」

ローズの言葉を合図と認識し地面に着地、じんわりとステルスを除する。

「ヒイイイ!!」

俺を見た瞬間、悲鳴をあげ、毛布を引っ張り、全力でベッドの上を後退。そのまま枕の下にヘッドイン。

「ああああ、コジマは・・・まずい。」

うわぁ・・・相当やられてるな・・・

「や、山田先生落ち着いて、彼は何もしませんよ」

となだめるローズ先生。しかしその言葉は、動物を怖がる子にける言葉だろ？

一方山^{リンクス}猫を怖がる子、もとい山田先生は枕の隙間から、ちらとこちらを見る。

「あの・・・複眼閉じてもらっていいですか？」

どうやらこの目がトラウマらしい。

カシュンッ

一個だけカメラを残してそのほかは全部シャッターをかけた。これで単眼だ。

「はぁ、これで直視できます。そういうギョロつとしたものだめな

んですよ」

というと枕から顔をだし体を起こす。

複眼がダメなのか・・・ステイグロとかアリーヤとか見たらどんな反応するのだろうか。

とりあえず正気になったから謝ろう。

「試験の時、理不尽な事してすいませんでした」

「いえ、あの時私も大穴を開けようとしていたので・・・」

「ああ、後、明日から警備員としてここで働くのでこれからよろしくお願いします」

「え、あ、はい。分かりました・・・」

案の定、会話がとまる。

山田先生は涙目になっているので相当トラウマになっていることが予想される。

ここは切り上げた方がいいか？

「ええと・・・こっちに来たばかりでお見舞い品用意できませんでしたけどお大事に・・・じゃローズ先生行きましょうか」

「ええ。山田先生、お大事に」

俺はステルスとPICを起動し、保健室を後にした。

その4日後・・・

あの後、一通り学園をみて巡回路を記憶した。
それから毎日、学園地下から出動し巡回警備を行ったが特に目立つ
ことも無く、

暇なときは中央塔の上で学園や街を見回して、荒廃する前の世界を
思い浮かべていた。

そして今日の警備が終了して地下に戻った。

「お勤めご苦労さん。何かあった？」

「いいや何も。でもなんか学園が騒がしかった気がするな」

「それは明日、クラス対抗戦があるからね。あなたには関係無いと
思うわ」

「そうだったのか」

クラス対抗戦というのはクラスの代表が戦うものらしい。本当に関
係ないな。

「じゃあ明日も普通に警備すればいいのか？」

「残念。明日は特別任務があるぞ」

「うお！千冬先生！いつの間に？！」

「今来たばかりだ。で、特別任務についてだが、座って話そう・・・
」

《作戦を説明する》

Reconstruction (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

このぐらいのオリジナルなら問題ないですよね？
ご感想などよろしくお願いします。

次回はホワイトグリンツの設定。ローズ・クラークのプロフィール
を載せます

S t a t u s (前書き)

特に書くことないな・・・

S t a t u s

ホワイト・グリント

A C 4の主人公だとして書いております。

体高・・・約1 m 9 0 c m

重量・・・約6 t

最高速度・・・P I Cの搭載により白式とほぼ同じ速度で飛行可能（O B時）

装甲・・・I Sの装甲とは比べ物にならない位硬い。ぶっ壊せる兵器はラウラのレールカノンぐらい

プライマルアーマー（P A）・・・言わずと知れた万能防護膜。近接武器以外ならガード可能。満タンの状態を貫通するにはそこそこ強い兵器が必要。まずはP Aを減衰させるんだ！！

コジマ粒子・・・コジマ汚染はP A展開中のみ、たとえばI SがP Aの近くにいるとシールドと干渉し、シールドエネルギーをど削っていく。さらに長時間近くにいると装甲が脆くなる。展開を切ればただの無能粒子にもとどろり。

アサルトアーマー（A A）・・・シールドエネルギーの残量にかまわずバリアーを吹き飛ばす鬼仕様。アリーナの遮断シールドもお構いなし。山田先生が助かったのは絶対防御のおかげ。

武装・・・ACFAのそのままの武装。今のところ弾薬が補給されず、あらゆる意味で現実は厳しい。

格納庫・・・片方にはPICとステルスが在宅。もう片方は空き家・・・なんとも、情けない・・・

その他設定・・・PICの搭載により無音で半永久に飛び続けることができるようになった。頭の中の記憶などは端末などに送ることができる。iPhoneのように

ジェネレーターについて・・・ゲームでは発電が有限のようです。この作品ではとりあえず無限にしますが、作中ではその設定にあまり触れないようにします。

ローズ・クラーク

モデル・・・DEADSPACEよりアイザック・クラーク。MG Sよりローズマリィ。

身長・・・165cm

体重・・・53kg

口調・・・ローズさんをお手本に。

顔・・・ローズさんを（ry

戦闘的な部分・・・こちらはアイザックさんがモデル。前話の千冬さんのお話の様な戦いっぷり。

技術的な部分・・・材料さえあれば自分で何でも作っちゃうすごい人。機械の分解、メンテナンスもお手の物。そしてその腕を買われて、ネクストの管理、整備などの担当になった。

S t a t u s (後書き)

ローズさんの設定が思いつかん……モデルがいるからだよな。

他の設定についてはフロム脳でどう料理されても結構です。

どうしても気になることは感想などで質問していただければ追記します。

次回はゴーレム先生登場です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9870x/>

IS < インフィニット・ストラトス > After sinking

2011年12月19日13時48分発行